



大阪府八尾市

地域の未来と アントレプレナーシップ

The Future of Communities
& Entrepreneurship

教育業界でも注目されるアントレプレナーシップ(起業家精神)。この連載では、全国さまざまな地域の未来に向けて取り組むアントレプレナーの方々取材し、何かを変える一歩目の踏み出し方、高校教育にも通じるアントレプレナーの視点を探ります。

第6回：病院を飛び出し地域へ。看護の知識を活かす新たな場所



味わった「社会的孤立」 地域をつなぐ食堂を構想

まさか自分が、おむすび屋さんの店主になるとは。もともと総合病院で看護師として働いており、集中治療室などの最前線でキャリアを積むポジションにいました。このまま一生病院で働き続けるものだ、信じて疑わなかった。そんな私に転機が訪れたのが、長女の出産でした。長女は重度のアレルギーをもって生まれ、1日3回お風呂に入れて薬を塗り、包帯を巻き直すという生活が続きしました。その間、家の外とのつながりはほとんど途絶えていく。ふと思いついたのが、病院で働いていたころに出会ったおじいちゃんのこと。退院が決まったのに「家に帰っても一人だから」と嘘をついて退院を渋るのです。長女のケアで家から出られない日々を送り「ああ、あのおじいちゃんはこのくらい気持ちよかったのかな」と、身をもつて社会的孤立を実感しました。なかなか見えないだけで、地域には「つながり」を求めている人が、きっとたくさんいる。その人たちが、安心して一緒にご飯を食べられる場所があればいいのにと

「おむすびスタンド むすんで、にぎって。」店主
コミュニティナース
小鹿千秋さん

大阪府生まれ。総合病院で看護師として勤務後、自身の社会的孤立の経験を機に、2017年に地域食堂「おかえり処 おむすびころりん」をオープン(店主は母)。その後コミュニティナースを知り、2021年に自身の店として「おむすびスタンド むすんで、にぎって。」を開業。株式会社日和舎代表。



考えていて、2人目の子どもの育休中に、実家の酒屋が空き倉庫状態になっているのを改装し、地域食堂を開くアイデアを思いつきました。構想を話したところ、家族は「あなたがどうしてもしたいというなら」と賛同してくれた。ただし、私が看護師の仕事を辞めないこと、育休明けには必ず復帰することが条件。私の代わりに、母が店主を引き受けてくれました。

「地域を結びたい」「多世代がごろごろ変わるように来てほしい」と、思いを周囲の人に話していたところ、ある人が「『結ぶ』と『ごろごろ』で『おむすびごろりん』のような店名はどうか」と言ってくれたんです。それはいい、と名前が先に決まったことで「だったらおむすびの定食を出しては？」とメニューも決まり、地域食堂「おかえり処おむすびごろりん」がオープンしました。お客さんが次々とやってきて、常連さんも増え、あちこちで井戸端会議が始まるような食堂になっていきました。

「治す」だけではない つながりを育む支援を

食堂を手伝うなかで、ある日、よく来てくれる女性の手がこわばっていることに気づきました。「年だから」と笑うその女性に、「リウマチの初期症状かもしれないから、一度受診してみても」と勧めたところ、本当にリウマチだったのです。早期発見できたおかげで、薬ですぐに楽になったと喜んでくれました。

この出来事は、私にとって大きな発見でした。医療や看護の知識をもつ人間が、

病院ではなく「まちの中」にいることには大きな意味がある。そう気づいて調べていくうちに、「コミュニティナース」という存在を知りました。コミュニティナースとは、病院という枠を超えて地域の日常に入り込み、住民の心身の健康や安心をサポートする活動のことです。世界保健機関（WHO）の定義では、健康には「身体的健康」「心理的健康」「社会的健康」の3つがあります。病院でアプローチできるのは身体と心理の健康ですが、「家に帰りたいくない」と言ったおじいちゃんに欠けていたのは「社会的健康」でした。社会的健康は、誰かとつながっていくことでしか育めません。そのことに気づいた私は、もつと地域に深く関わるために病院を退職し、新たに自分の拠点をもつことを決めました。不安よりも「自分でやってみたい」好奇心のほうが勝つてしまった。

2021年、「おむすびスタンド」むすんで、にぎつて。」を八尾市にオープンしました。とはいえ、訪問看護の仕事を週に数日しながら、ダブルワーク状態でのスタートでした。

集客に苦戦、試行錯誤

まずは、おむすびスタンドとしての経営を成り立たせ、地域の方に集まっていただかなくてはなりません。ところが、私はいきなり壁にぶつかりました。お客さんが来ない。母が店主を務めた地域食堂では苦勞しなかった「集客」に苦戦したのです。

実は、母はもともとPTAや町内会、青少年指導員などの地域活動を熱心に



1



2

1 知人の助言がきっかけで提供するようになった、おむすび。「お米は、赤ちゃんからお年寄りまで食べる国民食。誰も排除されない、ハードルの低い場所にした」という思いとつながった」と小鹿さん。

2 「おむすびスタンド むすんで、にぎって。」の店の前にある看板は、あるものを活かし、文字や絵は小鹿さん自身が描いている。温かみのある店構え。取材中にお客さんが訪れる場面もあった。

していた人でした。土台となる人間関係があったから、母の地域食堂には地域の人たちがすぐに来てくれた。でも、私にはその土台がない。病院勤務時代には気にもしなかった「知っていたら、お客さんに選ばれなければ、仕事が成り立たない」という当たり前の現実と直面したのです。

手当たり次第に「やってみよう」と思ったことを試しました。お客さんに喜ばれる商品を探るため、手を替え品を替え100種類のおむすびを作ったことも。反応がまったくないこともたくさんありましたが「これは効果がない、というデータが取れたな」と、なんとか前向きに捉えるようにしていました。

心が折れかけたころ、友人が「店のカウンターをもっと前に出して、ドアも外したら？」と助言をくれました。真冬の時期でしたが、素直に取り入れてみたら、店が認知され、なんと売れるようになった。試行錯誤の連続で、常連さんも増え、経営も上向きになっていきました。

関係性ができてから「実は看護師なんですよ」と明かすと、「ちょっと血圧が高くて」「最近食欲がなくて」と、ちょっとした悩みを打ち明けてくれる方も多いです。話題作りの仕掛けとして、お店のカウンターには血圧計も置いてあり、測定するとポイントが貯まり、おむすび引き換え券と交換できる仕組み。行政の相談窓口には行きづらくても、「おむすびを買って来た」という口実があれば、人は足を運びやすくなります。日常の動線上に

あり、ふらっと立ち寄れる場所。少しずつ、そんな理想の場所に近づいているかなと思います。

動かないのが一番の失敗

もしかしたら高校生でも「地域のために何かしたい」と熱い思いをもっている生徒さんもうるかもしれません。でも「具体的に何をしたいかわからない」と立ち止まってしまつ子も、少なくないのではないのでしょうか。そんな高校生に伝えたいのは「まずは、既に何かやっている先輩のところへ足を運んでほしい」ということです。

自分が「ちょっと気になる」「何とかしたい」と思うようなことには、必ず、先に取組んでいる誰かがいます。ゼロから自分だけで取組み方を考えるよりも、先人がトライしてくれた失敗から学ぶのが一番の近道です。私も、リウマチの女性とのやりとりのあと「地域でこういうことをやる手段はないのか」と調べて「コミュニティナースの活動を知り、実際に活動されている方の講義を受けに行きました。人から言われたアドバイスを、斜に構えずに取り入れる素直さがあれば、何をすればいいかの指針が得られます。そのうえで、どんな失敗する。うまくいかなければ「このやり方はダメだ」というデータが取れるから。「やりたいのに動かないこと」が、一番の失敗ではないでしょうか。

私もどんどん動きながら、まちの中に「お守り」のような人や場所を増やし、住み慣れた地域で、誰もがその人らしく生きられる未来をつくっていききたいです。



地域の未来につながる アントレプレナーの視点

視点

1

病院の中では見えなかった「社会的健康」の重要性に気づき、日常的に立ち寄れる「おむすびスタンド」というアプローチで、地域の孤立解決を図る。居場所になるだけでなく、おむすびの味で選ばれるようメニュー開発や集客も試行錯誤。

視点

2

いきなり大掛かりな起業をするのではなく、育休中に実家で食堂を開業したり、訪問看護をしながら自分の店舗をオープンしたりと、小さく始めて、試しながら動いた。失敗を「データ収集」と前向きに捉えて、柔軟に改善を重ねていった。